

[総合的な学習]

社会生活と関わり，地域を再発見する活動構成

－「商店を紹介するテレビ番組作り」に取り組む活動を通して－

尾矢 貞雄*

1 はじめに

当校は長岡市街地の中心部にあり，周辺には多くの商店が建ち並んでいる。ここには，時代の先端を意識しながら長岡市の商業をリードしてきた商店や，古くからの伝統を今に受け継ぐ老舗など，歴史と共に歩んできた商店が数多くある。私の担任する学級（3年生）の子どもたちにとって，これらの商店は身近なものではあるが，そこで働く人とかかわりはほとんどないため，商店の歴史をはじめ，そこで働く人の思いや願い，考え方や生き方に触れることなく生活をしている。そこで私は，こういった特色をもつ地域を「総合的な学習の時間」の素材として生かすことができないかと考えた。子どもたちが生活の場である地域に出かけ，そこで生きる人とかかわる活動を通して，その生き方にふれ，そこで地域を再発見してほしいと考えたのである。

地域再発見の活動は様々に考えられるが，私は「テレビ番組作り」という方法を通して，この活動のねらいに迫ろうと考えた。「テレビ番組作り」という学習方法には，次のような優れた点がある。

- (1) テレビ番組は子どもたちの生活に深く浸透しているが，その制作方法についてはあまり知られていないため，子どもは興味をもって活動に取り組むことが大いに期待できること
- (2) テレビ番組は制作するために様々なプロセスを経る。事前の取材や番組構成，そして収録など，解決しなければならぬ問題がはっきりしており，問題解決学習として優れた学習方法であること
- (3) テレビ番組は，視聴者が見て分かりやすい内容を作るという目的があるため，相手を意識した表現力を育てることができるということ

このように，本研究は「テレビ番組作り」の利点を生かして，地域を再発見し，自ら問題を解決していこうとする態度や相手を意識した豊かな表現力を育てることを目的として行う。なお，子どもたちが「テレビ番組作り」を自分の課題としてとらえるために，子ども間の話し合いを重視した活動を構成していく。また，本研究は株式会社エヌ・シー・ティ¹⁾（以下，NCTと記す）の協力を得て行う。

2 研究の目的

本研究は「テレビ番組作り」を通して，子どもたちが地域を再発見し，自ら問題を解決していこうとする態度を育てるとともに，相手を意識した豊かな表現力を育てることを目的として行う。

3 研究の内容と方法

本研究の内容を，次の視点から明らかにしていく。

(1) NCTと実施計画の立案に関する打ち合わせを行い，協力体制を確保する

テレビ番組作りは，専門的な知識と技術が求められる。当校の近くにはケーブルテレビ局のNCTがあるため，NCTに当研究の目的をお伝えして協力を依頼する。そして，番組作りの工程や具体的な協力事項について，綿密に打ち合わせを行った上で活動を始める。この協力体制の確保と綿密な計画の立案が，子どもの問題解決学習を確かにサポートすることができると思う。

(2) どのような番組を作るかを指導者と子どもが話し合って決める

活動の構想を指導者がもっていても，それを子どもに押しつけたのでは，あるいは一方的に提案したのでは子どもは自分の力で活動を進めている実感や，活動への課題意識，連続する問題解決的な学びへの発展は期待できない。そ

* 長岡市立表町小学校

ここで、指導者は、全体構想をもちつつ、常に子どもの意見を聞き、子どもと話し合う姿勢を貫く。こうした姿勢を前面に出すことで子どもは、自分の力で番組を作っているという意識を持ち続けることができると考える。

(3) 小グループの話し合い活動を中心に番組作りを進める

番組作りは、5～7人の小グループを単位に話し合い活動を中心に行う。この程度の単位が、話し合いを円滑に進めたり、役割分担を明確にしたりすることができるからである。番組作りには、主に情報の収集や番組内容を構成する企画会議、撮影があるが、そのほとんどを子どもの手で進めていく。

(4) 取材活動を通して、地域の商店を見つめ、地域を再発見できるようにする

地域の商店を詳しく知り、その歴史や伝統、そこで働く人の思いや願いを理解し、地域の商店を再発見することが出来るように、商店へ行っての情報収集を綿密に行う。取材に行く前には、事前の情報収集や集めたい情報を明らかにしておく。

(5) 視聴者の立場で番組内容をチェックする編集長を置き、相手意識を持った豊かな表現力を高める

視聴者の立場で番組の内容のチェックする編集長（指導者）を置く。この立場からの助言が、子どもたちに相手意識をもった豊かな表現力を育てる手立てとなると考えるからである。同時に編集長は、番組作りの各工程におけるチェックや助言を行う。子どもたちは、各工程で編集長から決済をもらい次の工程に進むようにする。

5 研究の実際

(1) 活動計画（全51時間）対象とする子ども 3年生 男子16名 女子18名（計34名）

時数	活 動 内 容	留 意 事 項
4	NCTを見学する。 テレビ番組の仕組みや作り方、テレビ局の仕事について見学・学習をする。	・事前に、NCTとテレビ番組作りの目的や構想について十分に協議し、共通理解を得ておく。 ・番組の制作過程や番組作りに必要な物についてNCTからお話をしていただく。
1	子どもにアンケートを採る。 総合的な学習の時間でどんなことをしたいか、子どもたちにアンケートを採る。	・見学の後に総合的な学習のアンケートを採り、子どもの思いや願いを活動に反映できるようにする。
1	番組作りの工程を理解する。	・番組作り全体の工程をイメージさせ、番組作りへの意欲を高める。
3	番組のテーマを決める。 どんなテレビ番組を作りたいかを話し合う。	・テーマは、地域の人とかかわるものにする。 ・子どもの意見を聞いたり、保護者にアンケートを採ったりする。
40	番組作りのグループを編成し、番組作りに取り組む。 ・グループ編成を行う。 ・テレビ番組で紹介する商店を決める。 ・商店を取材し、集めた情報を整理する。 ・企画会議で番組構成を決める。 ・番組の各場面の台詞を考える。 ・NCTから番組内容についてアドバイスをいただく。 ・番組収録に必要な準備、リハーサルを行う。 ・番組収録を行う。	・グループは5～7人で編成し、なるべく子どもの希望を聞く。 ・取材活動が、番組の内容を大きく左右することを子どもに指導する。 ・NCT職員には、子どもの考えを一つ褒めて、一つ課題を与えるようお願いする。 ・地図作りは、社会科の学習と関連させて行う。 ・カメラワークは、三脚を使ってゆっくりと動かすことを指導する。
	撮影した内容を編集し、番組を完成させる。	・編集作業は、指導者が行う。
	NCTで放映していただく。	・保護者をはじめ、関係者への連絡を行う。
	DVDに保存し、子どもに配布する。	・著作権について子どもに指導する。
2	テレビ番組作りの活動を振り返る。	・蓄積したファイルを読み返しなが、自分の成長や学びを見つめる。

(2) NCTとの協力体制を確保したことで、番組作りへの期待を高めた子ども

テレビ番組作りは、専門的な知識と技術を必要とするため、テレビ局の協力が必要だった。長岡市には地域密着型のケーブルテレビ局（NCT）がある。そこで、NCTへ行って当局次長にお会いし、本研究の趣旨を説明し協力を要請

した。NCTは本研究への協力を快く承諾してくださり、テレビ番組作りの協力体制が整った。

具体的には、テレビ局の見学、テレビ番組作りへの助言、完成した番組のNCTでの放映の3点をお願いした。

テレビ局の見学(写真1)では、テレビ局の仕事をはじめ、テレビ番組がどのようにしてできるか、番組作りに必要な道具は何か、番組を作るために必要な役割は何か、番組作りで心掛けていることはどんなことか、について局次長から説明していただいた。特に取材活動では、取材を受ける人が嫌な思いをしないよう心掛けて取材することや、2分間のニュース番組を作るには4時間も時間がかかること、テレビ番組を作るときには、「誰に見てもらおうのか・何を伝えるのか」をはっきりさせること、番組は一人で作ることは出来ないこととお話していただいた。



写真1 テレビ局のスタジオを見学している様子

テレビ局の見学を計画し、局内にあるスタジオや収録機材の様子を見たり、局次長の話の聞いたりして、ほぼ全員の子どもが総合的な学習の時間でテレビ番組作りをしたいという願いをもった。

このように、NCTとの協力体制を確保し綿密な計画の打ち合わせをしたことで、子どもは番組作りへの期待を高めていった。

(3) どのような番組を作るかを指導者と子どもが話し合うことで番組作りを自分の課題として受け止めた子ども

子どもたちの願いを受けて、番組作りに取り組みはじめた。番組のテーマ決めでは、「地域に出て、地域の人とかがわかることができるテーマ」であることを条件に、全員で話し合っ決めて子どもと約束した。子どもたちは、「自分たちの考えが番組になるんだ」という期待をもち、テーマを考えた。子どもが出した番組テーマの意見は、全部で24テーマになった。この中からさらに話し合いを進めた結果、「地域の特色ある商店を紹介する番組」をテーマに作ることに決まった。その後、テレビ番組に出演してもらおう商店を決めた。子どもたちは地域に出かけ、特色ある商店を進んで探したり保護者から情報を集めたりした。最終的に子どもたちが候補にあげた商店は、57店にも及んだ。指導者は、番組作りのグループ編成を考え、その中から5店に絞ることを提案した。話し合いの結果、出演してもらおう商店は、大和屋²⁾、紅屋重正³⁾、長谷川陶器⁴⁾、渡邊肉屋⁵⁾、喫茶「茶蔵」⁶⁾の5店に決まった。このように、子どもと一緒に話し合っ決めてという姿勢を保つことで、子どもはテレビ番組作りを自分の課題として意識し、番組に出演してほしい商店を選び出すことができたのである。

(4) 小グループの活動を中心に番組作りを進めることで、自ら問題を解決しようと活動に取り組んだ子ども

番組に出演してもらおう5つの商店が決まると、どの商店を担当するかというグループ分け(1グループは5~7人で組織する)を行った。グループは指導者の意図で分けず、子どもの希望を優先させて編成した。グループ編成が決まると、各グループでの番組作りがはじまった。番組作りについての話し合いを「企画会議」と名付け、グループの責任者を中心に会議を進めることとした。まず、番組ができるまでの工程について子どもに詳しく説明をした。これは、子どもが番組作りに見通しをもって取り組むことができるようにすることと、番組ができていくまでの課題を明らかにすることで活動を問題解決的に進め、自分の力で番組を作っていることを実感として子どもに感じさせたかったからである。(写真2)



写真2 企画会議の様子

企画会議は子どもたちの話し合いを進めることとし、企画案を編集長(指導者)に提出するようにした。

編集長は、企画の内容について細かく子どもに質問した。これは、話し合いの内容が確かなものであったか、全員の意見としてまとまっているか、思いや願いをもって企画を作っているかを確かめる意図があったからである。はじめのうちは、多くのグループが編集長の細かい質問に答えることができなかった。しかし、何度も話し合いを重ねるうちに、編集長の質問にきちんと答えることができるようになってきた。編集長から企画の許可をもらおうと、「やったあ。」「よし、次に進もう。」と、子どもたちは声を上げて喜

び、次の工程に進んでいった。

役割分担を決める際には、番組の各場面ごとの役割分担表を作り、皆が様々な種類の役割を演じることができるようにした。主な役割は、ディレクター、キャスター、リポーター、カメラマン、カンペの5役である。配役が決まると、配役に必要なものを作り、練習をはじめた。ディレクターは、演者の細かな動きや表現の仕方に注意を払いながら、その場面の総指揮をとる練習をした。キャスターやリポーターは、台詞を頭に入れ、話す速さや声の大きさに注意して練習をした。カメラマンは、ビデオカメラをテレビにつなぎ、自分の映し出す映像が視聴者にはどのように映るかをモニターでチェックしながら、カメラの動かし方を練習した。カンペは、スケッチブックに各シーンの要点を大きな文字で書き出していった。

このように、番組作りの工程を示し、小グループでの話し合い活動を中心に話し合いを進めることで、子どもたちは自ら問題を解決していこうとする意欲を高めていった。また、この小グループの編成は、一人一人が役割を担い、番組作りという一つの目的に向かって協力していく上で適当な人数であった。

(5) 商店での取材活動を通して地域の商店の歴史や伝統などを再発見していった子ども

情報提供番組の中身は、事前の情報収集や取材活動で得た情報の質と量で決まる。商店の取材活動に行く前にまず、保護者や知人からその商店の情報を集めるようにした。その上で、聞きたいことや分からないことを書き出し、その商店へ行き取材を行うようにした。(写真3) 子どもたちは用意しておいた質問を店長さんにして、その商店の歴史、取り扱っている商品、そこで働く人の気持ちなどをメモに書き留めた。この取材活動を通して、子どもたちは地域の商店について、新たな発見や気付きを得た。その様子を次の3店の取材活動から紹介する。

大和屋の取材活動では、「戦争があったときには、お菓子を作る材料がなくてお店を続けていけなくなりそうだった。でも、お客さんが励まし、支えてくれて、230年もの間、このお店を続けてくることができました。」という店長の話聞き、子どもは、この商店が地域の人々と共に商売を続けてきたことや店長のお客への感謝の気持ちを知り、この商店が地域の人々と深く関わり合いながら続いてきたことを感じていった。また、大和屋が全国名菓協会の会員であることや、季節の和菓子はすべて手作りであること、テレビ番組「水戸黄門」でも紹介されたことがあることなど、子どもたちは今まで知らなかった大和屋の姿を発見した。



写真3 大和屋で取材活動をする子ども

喫茶「茶蔵」の取材活動では、子どもたちは、その建物のつくりさに驚いた。店内に入ると、目の前には絵画や彫刻作品が並んでいるギャラリーが広がっていて、喫茶店が見当たらない。実は、喫茶店は2階にあったのである。喫茶店には作家や画家の作品を購入することができるコーナーもある。ここは美術作品を自由に鑑賞することができる喫茶店であることを店長から聞いた子どもたちは、喫茶店のイメージを大きく変えた。子どもたちは、美術作品のもつ世界をお客さんに楽しんでもらいたいという願いを店長がもっていることを、そのお話から感じ取っていった。また、店長が当校の卒業生であることが取材活動から分かり、子どもたちは店長に強い親近感を抱いた。

長谷川陶器の取材活動では、「この店は陶器を販売しているだけでなく、ラーメン屋やレストランといった外食産業と言われるお店で使う道具を取り扱う商店です。ラーメン屋をオープンしようとする人がこの店に来ると、一日でお店を開くために必要な品物の準備が出来るんです。～中略～私は、こちらからホテルやレストランに向かい行って、商品を売っています。～中略～来てくれるお客さんのお店が繁盛するように願いながらお客さんと接しています。」という店長の話を通して、商売をする人は商店でお客が来店することを待っているのではなく、自らが商品を売るために歩いていることや、商売をする人は、お客に感謝の気持ちと幸せを願う気持ちをもって接していることを子どもたちは知った。

(6) 編集長を置いたことで、相手意識を持ち豊かな表現力を高めた子ども

目に見えない視聴者の立場で番組内容を構成することは難しい。そこで、視聴者の立場で番組内容をチェックする編集長(指導者)を置いた。店長さんへのインタビュー場面では、子どもたちは取材で得た情報をもとに、その商店のよさをアピールする台詞を考えた。しかし、子どもたちの考えた台詞は、伝えたいことをリポーターが話してしまうため、視聴者に分かりやすい内容とならなかった。(資料1)そこで編集長は、視聴者の立場で子どもたちの作っ

た台詞について助言をした。(資料2)すると、子どもたちは伝えたいことは、店長さんに喋ってもらった方がいいことを理解していった。(資料3)

リポーター：次に、大和屋さんの歴史について聞きます。どうしたら日本三大名菓になれるんですか？
 店長さん：(日本三大名菓のことについて説明していただく)
 リポーター：全国名菓協会の賞状をどうしたら取れたんですか？
 店長さん：(そのことについて説明していただく)
 リポーター：どうやって御用箱をもらったんですか？
 店長さん：(御用箱について説明していただく)

資料1 子どもが提出した台詞案

編集長：このテレビ番組を初めて見る人は、日本三大名菓とか全国名菓協会とか、御用箱のことを知っているのかな？
 子ども：知らないと思う。
 編集長：まず、こういうすごい言葉の意味を視聴者がよく分かるようにインタビューをした方がいいよね。リポーターは、初めてお店に入ってお店のレポートをしていると視聴者は思うんだよね。
 子ども：うん。
 編集長：初めてお店に入るリポーターが日本三大名菓とか全国名菓協会とか、御用箱のことを知っているのって、どう思う？
 子ども：変だ。おかしい。
 編集長：じゃあ、どうすれば視聴者に分かるようになるの？
 子ども：初めてお店に入ったように話せばいいんだ。

資料2 編集長と子どもとの話し合い

リポーター：(日本三大名菓の賞状を見ながら)店長さん、あれは何ですか？
 店長さん：日本三大名菓のことについて説明してもらおう。
 リポーター：へえ、そうなんですか。(次に、御用箱を指さして)店長さん、あれは何ですか？
 店長さん：御用箱について説明してもらおう。

資料3 編集長と話した後でできた台詞

6 成果

(1) テレビ局との協力体制を確保することで、子どもの番組作りの意欲や課題意識が高まる

NCTと番組作りに関する打ち合わせを行えたことで、指導者が番組作りの専門的な知識を得ることができた。これは、指導者が編集長として子どもたちの相談に乗ったりアドバイスをしたりするときに大いに役立った。指導者が活動に見通しを持つ意味でも、テレビ局との打ち合わせは必要である。こうした協力体制を得るためには、指導者の活動の目的と計画をきちんと相手に伝え、理解、共感を得ることが大切である。

また、NCTで子どもの作ったテレビ番組を放映していただける内諾をいただけたことも、子どもが課題意識を高め、持続させていく上で大きな意味をもった。子どもたちに、「素晴らしい番組を作れたら、NCTで放映してもらえないかもしれないよ」と話すと、子どもは番組作りにさらに意欲をもって取り組んだ。完成した作品は、平成16年2月に、1週間に渡ってNCTで放映された。テレビ番組が放映された感動をA男は次のように書いている。(資料4)

「初めて見た時は、子どもでもこんな立派な番組を作れるのか、と思いました。見ていると、『NGシーンもあったな』『ここ間違えたよな』と、作っているときの思い出がたくさん頭に浮かびました。ドキドキしたセリフシーンもちゃんと覚えていました。本当にこんなことがあるのかと、夢にまで見た番組ができたので、本当に本当に感動しました。この経験は、今の自分に役立ったと思います。」

資料4 番組作りを終えてのA男の感想文

(2) 活動に見通しをもたせ、小グループの話し合いを中心に行うことで、自ら問題を解決しようとする子どもの意欲を高めることができる

番組作りの工程を示し活動に見通しを持たせた上で、小グループの話し合い活動を中心に企画会議を進めたことは、話し合いを活発にさせ、子どもの意識の中に活動の連続性を生み出させ、自ら問題を解決していこうとする意欲を高

めることにつながった。活動全体を概観できる達成可能なスモールステップの課題（工程）を子どもに提示する価値は十分にある。

(3) 取材する視点を明らかにして店長の話聞くことで、子どもは商店について新たな発見や気づきを得る

取材前に、取材の視点を明らかにして店長から話を聞いたり質問したりすることで、子どもは、自分の地域にある商店を見つめ、そこから新たな発見や気づきを得ることができた。以下に、取材活動を通して、子どもが地域の商店から得た新たな発見や気づきを示す。

- ① 地域の商店は、地域の人々と共に歩んできた歴史があり、それはこれからも変わらないこと。
- ② 店長はお客様に感謝の気持ちを持ち、お客様の幸せを願って接客していること。
- ③ 店内には、お客様に楽しい時間を過ごしてもらおうとする店長の工夫があること。
- ④ 店長は、商品を売るために自らお客様のもとに足を運んでいること。
- ⑤ 歴史と伝統のある商店が自分の身近な場所にあり、店長はその店を大切に守っていかようとしていること。

このように、子どもたちは、店長の地域の人々への感謝の思いや幸せを願う気持ち、つまりお客様を大切にしている心を感じ取ることができた。また、子どもは、古い歴史と伝統を誇る有名な老舗が自分の身近な場所にあることを理解し、そして、店長が歴史と伝統を守っていかようとしている姿から、歴史と伝統は受け継がれていくものであることを感じることができた。

(4) 編集長を置くことで、子どもたちは相手意識を持ち表現力を高めることができる

視聴者の立場で企画を読む人（編集長）を置くことは、子どもを目に見えない視聴者と対峙させ、視聴者に分かりやすい表現方法の工夫を考えさせる手立てとなる。客観的に番組構成を評価する人やシステムを作ることが、子どもの表現力を高めることにつながる。

7 課題

地域の商店について再発見することを目的として行ったが、その内容が3年生の発達段階にしては難しい部分があった。例えば、その商店の歴史について、230年前の江戸時代からの商店であるといっても、その時代背景や時系列を理解できた子どもは少なかった。こうした内容を子どもが理解できる手立てを考えなければいけない。

また、目に見えない視聴者を意識しながら番組を構成していくことは、3年生には難しかった。インタビュー場面の収録では、事前に綿密な情報収集や打ち合わせがあった上で、リポーターが視聴者に伝えたいことを相手から聞き出す形態をとるのが通例であるが、こうした一見矛盾するインタビューの構成を、3年生は理解できないのである。そこで編集長という助言者をおいたのであるが、3年生でこうした番組を作る場合は、リポーターの立場をよく理解させるための手立てを講ずることが大切である。

最後に、テレビ番組作りにおいて、子どもにどこまで要求するかを指導者がもっていることが大切である。今回のテレビ番組作りでは、撮影までは子どもたちの手で行い、編集作業は指導者が行った。編集作業はパソコンのビデオ編集ソフトを使って行うもので、これは3年生ができるものではない。活動の目的と照らし合わせて、子どもにどこまで要求するかをきちんと決めておくことが大切である。

脚注

- 1) 株式会社エヌ・シー・ティ 長岡市を拠点にテレビサービスやインターネットサービスを行うケーブルテレビ局
- 2) 大和屋 江戸時代創業の歴史と伝統ある和菓子屋。菓子「越乃雪」は日本三大銘菓の一つに数えられている。
- 3) 紅屋重正 江戸時代創業の歴史と伝統ある和菓子屋。大手饅頭は長岡市の名物。
- 4) 長谷川陶器 外食産業の食器および厨房用品、関連資材を取り扱う商店。
- 5) 渡邊肉屋 精肉・惣菜の販売を行う商店。
- 6) 喫茶「茶蔵」 ギャラリーが併設し、美術作品を鑑賞することができる喫茶店。

参考文献

- 1) 文部科学省、小学校学習指導要領、2003年
- 2) 新潟県教育委員会、「総合的な学習の時間」のガイドライン、2001年

[学習指導一般]

学び合い・深め合いを促すコミュニケーション能力を育む取組

秋山 敦子*

1 はじめに

新学習指導要領が全面実施されてから二年余りが経過した。この間、「生きる力」を育てようとして、自ら学び、自ら考える力の育成や、基礎基本の定着を目指して日々の学習指導に取り組んでいる。中でも、国語科改訂の柱の一つとなっている「伝え合う力」の育成については、できるだけ多くの機会をとらえて実施しようと取り組んできた。小学校学習指導要領解説「総則編」で述べられているように、伝え合う力は「教科の枠にとらわれず学校教育全体の中で実施していく」¹⁾ ことで生きてはたらく力となっていくのだと考えているからだ。

また、新学習指導要領で示された「伝え合う力」はコミュニケーション能力そのものだととらえている。「伝え合う」という時、そこには伝える側と聞く側が存在している。これまではどちらかというところ「伝える」ことに目がいきがちであったが、伝えることをしっかりと受け止めることのできる聞き手の存在を抜きにして「伝え合う」ことは考えられない。『伝えることと受け止めることがお互いにできてこそ「伝え合う」ことが成立する』²⁾ のであり、共によりよい考えを求めていこうとする互いの存在があってこそ伝え合う活動が充実していくのである。

2 テーマ設定の理由

(1) 双方向のコミュニケーション能力

上述したように、「伝え合う」ことは伝えることと受け止めることが互いにできてこそ成立する。つまり、コミュニケーション能力を育成していこうとする時、伝える側と聞く側（受け止める側）双方の高まりを目指すことが重要となるのである。しかしながら、これまでの取組を振り返ってみると、コミュニケーション能力が発揮されるべき学習の場で、発表方法やまとめ方、話し方など「複数の聞き手を相手とした一方通行的な伝える学習に重点が置かれすぎていた」³⁾ のではないだろうか。そのため、子どもも発表することを終着点ととらえ、自分が発表し終わった時点で満足してしまうことが往々にしてあった。また、話し合い活動でも、互いの意見を述べたり質問したりする姿から、一見コミュニケーションが成立しているように見える。しかし、実際は自分の考えを伝えるだけのやりとりであったり、一問一答で終わる互いにとって深まりや広がりのみられない質問であったりすることが多いのではないか。こうした状況から脱却するために、相手を理解し受け止めることのできる聞き手の存在が重要になる。『「聞く」ことは単に相手の話に耳を傾けるだけでなく、そのことばの背景までも知ろうとすること』⁴⁾ ではないだろうか。そうやってこそ相手を理解することができ、コミュニケーションが成立するのである。伝える側と聞く側で互いの多様な考えを交流させ、そこからよりよい考えを求めていこうとする、双方向のコミュニケーション能力の育成が大切である。

(2) 生きてはたらく力に

伝え合うことに重点を置いた国語科の実践は多い。しかし、コミュニケーション能力の育成を目指そうとするとき、国語科の学習の中だけでなく、各教科や総合的な学習の時間など、教育活動全般の中で伝え合うことを意識した学習活動を組み入れていくことが大切である。これまでも総合的な学習の時間や各教科の学習の中で、目標や内容面で相互に関連があれば、指導時期を考えたり、題材の取り上げ方を考慮したりしながら活動を展開してきている。しかし、それが単発的な取組であることも少なくない。コミュニケーション能力の育成に当たっては、自分の考えや思いを伝え合うという活動を繰り返し行うことで、より効果が期待できるはずである。年間を通した着実な学習活動の積み重ねのもとで、子どもはコミュニケーション能力を確実に身に付け、生きてはたらく力としていくと考える。

* 新潟市立山の下小学校

3 研究の目的

コミュニケーション能力は、子どもがことばを使って自分の思いや考えを交流させるその瞬間瞬間をとらえて育成されるものである。また、そうした取組が継続されることで、確かに子どもの身に付いていく。従って本研究は、子どもがコミュニケーション能力を高めながら学ぶ姿の集積と、その要因の分析を通じた指導法の改善を目的とする。

4 研究の方法

集積した子どもの学ぶ姿から、コミュニケーション能力を育む学習活動を組織していく上で重要な構成要因の分析を行う。その際、次の点に着目する。

- (1) 子どもの中にコミュニケーションを成立させる技能が身に付いているか。
- (2) 自分のことばによるコミュニケーションで、相互の意志疎通が図られているか。

5 学習活動の実際

(1) 対話を通して学ぶ子どもの姿

一人一人のコミュニケーション能力を高めるために、相手の反応を直に感じながら話したり聞いたりする「対話」を学習に組み入れていくことにした。対話の基本は一人対一人で相手とじっくり向き合うところにある。しかし、学習によっては、3～4人のグループになり対話を行うことも考えられる。また、自由に相手を変えながら主体的に対話を進めていく方法など、ねらいに沿った形態を工夫しながら実践していくことも必要であろう。

① 情報交換しながらコミュニケーション技能を身に付ける

社会「大昔の暮らしをのぞこう」の単元では、各自が興味・関心をもった事柄や人物などに焦点づけた調べ学習を行い、その後に対話を行った。

対話を始めるまでに、自分が調べてきたことや得た知識に基づく自分の考えを文章でまとめるよう指示し、話がしやすいように準備をさせた。

対話を行うに当たっては、次のようにやり方を示した。

- i) どちらかが自分の調べたことを紹介する。
- ii) 聞き手は、メモを取りながら聞く。
- iii) メモを基に、質問や意見の交流を行う。(意見のやりとりが続くように)
- iv) i) から iii) を繰り返す。

調べた事柄や人物が共通する友達と対話を始め、できるだけ多くの人と対話するよう自分で相手を見つけながら活動に取り組みさせた。最初はぎこちない様子で対話を始めた子供たちも、一人目の友達との対話を終える頃には雰囲気をつかみ、スムーズに対話相手を見つけながら活動を進めていくことができた。

…略…本当に蘇我氏はひどい人だと思います。自分のために他の人を殺してしまうなんて考えられません。ここで立ち上がったのが、中大兄皇子と中臣鎌足です。二人は後に蘇我氏を滅ぼし、新しい政治を始めます。これが大化の改新です。私は大化の改新が起こって本当によかったと思います。大化の改新が起らなかったら日本の歴史も大きく変わり、今よりも悪くなっていたと思うからです。(中略) 中大兄皇子は、真っ先に自分のもっていた土地と人民を国に差し出したといいます。私はこれを知ってすごく驚きました。それと同時にこんなにたくさんの人民をまとめることができる中大兄皇子は本当にすごい人物だと思います。

Hさんのまとめ

…略…太子の天皇中心とした努力が無駄になったのだと中大兄皇子と中臣鎌足が暗殺したらしい。私は、偉い人は、天皇になったりすると自分勝手な人たちが出てしまい、暗殺されるという悲しいことになってしまふんだなと考えた。中大兄皇子と中臣鎌足は自分に批判的な豪族や聖徳太子の皇子を攻撃し、自分たちの仲間しかいないようにしてしまったのでびっくりした。今の時代、自分の味方しかいないことなどあり得ないことなのに、二人はすごい力をもっていたんだと思う。私は最初、中臣鎌足と中大兄皇子はすごい人だと思ったけど、今はこの二人はともつまらない生涯をおくったと思います。なぜなら、みんなの意見がまとまりすぎて、手応えがないからです。

Tさんのまとめ

〈資料1〉 Hさん、Tさんの対話前のまとめ

HさんとTさんは、共に大化の改新について調べ学習を進めていた。その中で二人のとらえには〈資料1〉のような違いがみられた。対話の中で、どのような意見のやりとりが行われるのかに関心を向けていた。

二人の対話は、和気藹々としながらも、じっくりと進んでいた。互いの調べた内容と考えを聞き、自分との違いを目の当たりにしたことで、なぜそのような違いがあるのか驚きを隠せないようだった。Hさんからは「すごい人だと私も思うが、つまらない生涯とは思わない」「つまらない生涯についてもっとくわしく聞かせてほしい」といった意見や質問が出された。Tさんもそれに答えながら「いろんな考えの人がいて話し合うことでよい考えが生まれる」という自分の考えに基づいて、白熱したやりとりを展開していた。対話を終えた二人のまとめは次のようであった。

Hさん……Tさんは皇子と鎌足はみんなの意見がまとまりすぎて手応えが感じられず、残りの生涯をつまらなく過ごしたと考えたけれど、私の考えは逆で、みんなの意見がよくまとまって、手応えを感じ気持ちよく生涯を過ごしたと思う。自分では思いもしなかった考えを聞いてよかったです。

Tさん……私は、Hさんが大化の改新で感じた「大化の改新をしなかったら日本の歴史が悪くなっていた」という考えには、同じく感じる場所もあるし、逆に違うと感じる場所がありました。同じところは、中臣鎌足と中大兄皇子が大化の改新で蘇我氏をほろぼすことはすごいけれど、私は、日本の歴史がそのときだけ変わっても、私たちのいる時代までは変わらないと思いました。なぜなら、自分に批判的な人たを排除していっただけでは本当のよい政治は行われなと思うからです。

この対話の場面では、対話に不慣れながらも相手の考えを聞き出そうと積極的に質問する姿や、自分の考えを分かってもらおうと一生懸命に伝えている姿が、他の子供たちにも見られた。全体としては、HさんとTさんのように調べた内容が共通している方が、内容面での広がりや深まりのある対話が行われたようである。相手の調べた内容や考えについて、より深まりのある対話を押し進めるには、対話そのものに慣れ親しみ、対話から得られるよさを実感しながら質問や意見をやりとりする対話の技能を高めていく必要がある。

② 他者の考えにふれながら、自分の考えを確かにしていく

1学期の総合的な学習の時間は、佐渡の歴史や文化、暮らしなどについて調べたり、体験したりする中から、佐渡のよさをとらえていくことを活動のねらいとしていた。ここでは、各自の興味・関心に基づく調べ学習と佐渡自然教室での体験活動を通して、一人一人が自分が獲得した「佐渡」に対する思いや考えをまとめる過程で、対話学習を行った。対話に入る前に全員のレポートを読み、聞きたいことや意見交換したいことをメモした状態にしておいた。そのため、それぞれの考えを紹介しあう時間を省くことができ、実質的な対話がより多くの相手と交わされた。また、事前に書いたメモがあることは、限られた時間の中で効率よく対話を進めていくことにつながったようだ。

Iさんは対話後、次のように書いている。

私は今日10人の人と対話しました。今まで、佐渡の人たちの「愛情」をただ「やさしい」としか思いませんでした。だけど、友達の意見を聞いて、佐渡の人たちは新潟の人より「やさしさ」と「安心感」をもたらしてくれるのだと考えが変わり、強くそうなんだと感じています。

友達との対話により、Iさんは、それまで考えていた「佐渡の人々の愛情」が単に「やさしい」という言葉と置き換えられるようなものでなく、「安心感」までも与えてくれるということに気付いている。このことから、自分と異なる考えにふれることによって、自分の考えが深まっていったことがわかる。また、佐渡の人たちだけを見つめるのではなく、新潟の人たちと比較して考えるという新たな視点を獲得していることも分かる。「強くそうなんだと感じている」という言葉からは、対話を重ねるなかで自分の考えを確かなものにしていったことが推察された。

Yさんは次のように書いた。

ぼくは友達と対話してなぜかと思ったことがあります。それは、「都会ではわからないことは聞けないが、佐渡では初めての人でも安心して聞ける」ということです。ぼくは、都会や佐渡でも普通に聞けると思いました。でもよく考えると、都会は人が多くてだれに聞けばいいか迷うけど、佐渡ではお年寄りが多くとても安心して聞けそうだなと思いました。それに、佐渡の人たちは心温かい人ばかりなのでまた安心できるんだなあと思いました。

「ぼくは普通に聞ける」と自分の考えを明確にもちながらも、Yさん自身の考えとは異なる考えを素通りすることなく、立ち止まって考えてみている。それまでYさんは、自然のすばらしさのみをとらえていたのであるが、ここで立ち止まり、考えたことによって、「人の優しさ」をもとらえることができたのである。

(2) 自己評価を対話に生かす

対話した後は必ず自己評価を行った。〈資料2〉

- ・自分の考えをしっかりと相手に伝えられたか
- ・相手の話をしっかりと聞くことができたか
- ・相手の考えを聞きながら、さらに自分の質問や意見が言えたか
- ・相手の質問や意見にきちんと答えたか
- ・今日の話し合い活動でよかったことは何か
- ・今日の話し合い活動で困ったことは何か
- ・次回の話し合い活動をより上手に行うために気をつけたいことは何か

という内容を、5段階評価と記述によって振り返っていった。数値にして振り返ることで、自分自身の対話への取組に対する意識を鮮明にすることができ、3であったところは次回4になるよう頑張ってみようといった意欲を喚起することにつながった。

記述部分には次のような点が挙がってきた。

- ・相手の話をよく聞く。
- ・はっきりと聞こえる声で話す。
- ・相手に分かりやすいように工夫して話す。
- ・自分からどんどん質問して、謎が残らないようにする。
- ・質問の答えに対して、自分の考えをもつことが大事。そうしないと話がそこで終わってしまう。
- ・聞かれたことにははっきり答える。わからなくても「わかりません」「調べておきます」のようにしっかり答える。
- ・「○○ということについて、□□さんはどう思いますか。」という質問の仕方をしてもらったので真似したいと思った。
- ・質問される内容が似ていることが多かったので、もっとくわしく調べたり、まとめたりしておけばよかった。

これらの内容は子どもに提示し、全員で考えられるようにした。そうしたことで、コミュニケーションスキルを意識しながら、対話に取り組んでいる子どもの姿が見られるようになった。

6 研究のまとめ

これまで対話学習を取り入れた実践を進めながら、コミュニケーション能力を發揮し、伸長させる子どもの姿を探ってきた。そこから以下に述べる三点を、子どもがコミュニケーション能力を育んでいく活動構成の要因としてとらえた。

(1) 対話を重視した活動展開を図る

相手の反応を直に感じながら話したり聞いたりする「対話」を学習活動に取り入れることで、子どもは次の力を培っていくことができた。

① 言葉を受けて返す態度と技能

前章(1)の①で紹介したHさんは、自分とは異なる考えを語るTさんに対し「自分はAについては同じ考えだが、Bについてはこう思う。Bについてのあなたの意見をもっと詳しく聞かせてください。」と対話を進めていった。ここでのHさんは聞き手であり、相手の話す内容を正しくとらえ、受け止めることが求められる。自分の考えとの共通点と相違点を明確に示し、その上でもっと詳しく聞きたいことを質問しているところから、HさんがTさんの意見をしっかりと受け止めていることが分かる。また、相手の話を鵜呑みにすることなく自分の考えと照らしながら聞き、異なる点やよくわからない点については適切な言葉と態度で相手に返していこうとするHさんの姿が見てとれた。自分の考えをしっかりとって相手の話す内容を聞くことも大切な技能といえる。

総合アンケート		アンケート	
月 日 名前		月 日 名前	
1	相手の質問や意見が答えられたか	1	自分の考えをしっかりと相手に伝えられたか
	5 ④ 3 2 1		5 ④ 3 2 1
2	相手の考えをしっかりと聞くことができたか	2	相手の考えをしっかりと聞くことができたか
	5 ④ 3 2 1		⑤ 4 3 2 1
3	相手の考えを聞きながらさらに自分の質問や意見を言えたか	3	相手の考えを聞きながらさらに聞くこともやめて詳しく聞きたいと思うことがありましたか
	④ 4 3 2 1		5 4 ③ 2 1
4	相手の質問や意見にきちんと答えたか	4	相手の質問や意見にきちんと答えたか
	5 4 ⑤ 2 1		⑤ 4 3 2 1
5	今日の話し合い活動でよかったことは何か	5	相手の質問や意見にきちんと答えたか
	④ 4 3 2 1		⑤ 4 3 2 1
6	今日の話し合い活動で困ったことは何か	6	今日の話し合い活動でよかったことは何か
	5 4 ③ 2 1		⑤ 4 3 2 1
7	今日の話し合い活動で困ったことは何か	7	今日の話し合い活動で困ったことは何か
	5 4 ③ 2 1		⑤ 4 3 2 1
8	今日の話し合い活動で困ったことは何か	8	今日の話し合い活動で困ったことは何か
	5 4 ③ 2 1		⑤ 4 3 2 1

〈資料2〉

月	国語 (175 書写31含む)	社会 (100)	総合的な学習の時間 (110英語活動15含む)	他教科及び教育活動全般
4	・命とふれ合う(8)	〈大昔の暮らしをのぞこう(15)〉	・探ろう、佐渡に暮らす人々(30)	
5	・問い合わせの手紙(5) ・短歌・俳句を味わおう(4)	歴史新聞づくりを通してわかったことを紹介する中で、内容の理解が深まるよう対話のスキルを培う。	佐渡についての情報や自分の思いをまとめる過程で対話を進め、自分の考えを確かにしたり、広げたりしていく。	朝学活でのスピーチに質問タイムを設け実施。
6	・似ている漢字(1) ・筆者の考えと事実を読みとろう(5) ・敬語の使い方(2) ・効果を考えて書こう(10)	〈武士の世の中をさぐる〉(25)		
7	・作品と出会う作者と出会う(16)	信長・秀吉・家康の三武将について調べたことを、対話のスキルを生かしながら紹介し合う。		学級会に対話のスキルを生かし、話す、聞く活動の活性化を図る。
9	・同じ訓をもつ漢字(2) ・あいたくて(2) ・漢字の読み方(1)	江戸時代の暮らしについて調べ、考えたことを基に対話し、考えを深める。	・新潟、再発見！(40)	
10	・学級討論会をしよう(5) ・話し合って考えを深め、意見文にまとめよう(11)	〈新しい日本の国づくりを見つめよう〉(12)	活動の節々で対話を行い、新潟について調べたことや郷土に対する思いを交流させながら、自分の考えを確実にしていく。	理科 人と自然とのかかわりについて調べ、対話のスキルを用いて自分の考えを深める。
11	・生き方や考え方を読みとろう(6) ・日本で使う文字(2) ・目的に応じて書こう(5)	「海のいのち」を読みとり考えたことを、対話を通して確かめたり深めたりする。		
12	・漢字の形と音・意味(2) ・言葉と文化について考えよう(12)	〈戦争から平和への歩みを見直そう〉(17)		
1	・漢字辞典を使って(2) ・わたしの六年間(7) ・送り仮名(2)	各自の視点から戦争について調べたことをもとに意見文を作成し、それについて対話し考えを深める。	・新潟に生きる私(25)	
2	・感動を言葉に(6) ・熟語の成り立ち(2)	〈暮らしと政治を調べてみよう〉(11)	国語と関連させながら、伝えたいことをまとめる過程で対話を進め、考えを確実にしていく。	家庭 近隣の人々との生活について考え、住みやすくするために自分のできることを対話を通して考える。
3	・伝えたい何かを見つけよう(14) ・覚えておきたい言葉(2) ・自分で選んで(10)	〈世界の人々とのつながりを広げよう〉(20)		
		対話のスキルを生かして、世界の人々とのつながりについて考えを深める。		

〈資料3〉

*実線枠は年度当初の計画、波線枠は追加計画

② 相手の考えのよさを認め、よりよい考えを求めようとする態度

いろいろな考えをもつ子どもが自分の考えをもちよって対話することで、多様な価値の存在や相手の表現のよさに気づき、触発されて自分の考えを深めることができた。これは、前章(1)の②で述べたIさんとYさんの姿から言えることであり、対話する双方に相手の考えを受け止め、理解しようとする意識があってこそ見られる姿である。Iさんは、それぞれの考えをもつ10人の友達との対話から、愛情という一つの言葉の中にいくつものとらえがあることに気づき、自らの考えを深めていった。Yさんは、対話を通して新たな考えや視点に出会い、それまで気付くことのなかった「人の優しさ」について考えるようになった。こうした子どもの変容は、相手の賛同やプラス評価を得ることで、より促される。自分の考えに自信をもったり、共に学ぶ楽しさを感じたりすることに繋がるからである。

以上の点から、対話学習を組み入れていくことは、双方向のコミュニケーション能力を育成する上で有効であると

考える。

(2) 自己評価の場を重視する。

自分の学びの意識化を図る「振り返りの自己評価」を継続して行った。ここでの自己評価は、活動を数値に表したり、文章で書き表したりしていく。子どもにとっては、1時間の学習の中での自分を振り返ることであり、自分の考えや思いを確かにする場となった。前章(2)で示したように、コミュニケーションのスキルに関する気付きや反省が多かったことから、相手に分かりやすく伝え、理解してもらいたいという意識の高まりが見てとれた。また、それらは次の対話に向けた準備に生かされ、表現の仕方を工夫する子どもが多く見られるようになった。こうしたことから、コミュニケーション能力を伸長するための自己評価の内容や方法を、さらに工夫していきたいと考える。

(3) 年間を通して対話学習を位置づけ、学習の場を広げる。

年度当初、対話学習を重視した単元を構想・実践することで、子どものコミュニケーション能力の育成を図ろうと考えた。その際、年間を通じて繰り返し対話学習の機会を設定していくことで、よりコミュニケーション能力を伸長させ、確かな力として子どもに身に付けさせることができると考えた。そこで、年間指導計画を見直し、教科間での実施時期を考慮した上で〈資料3〉のように国語、社会、総合的な学習の時間の中に対話学習を位置づけた。

しかし、実際に実践を始めてみると、単元の学習の中から活動に広がりが出てくるようになり、コミュニケーション能力を発揮したり伸長したりする場を書き加えていくこととなった。それが〈資料3〉の中の波線で囲まれた活動である。当初の計画に固執することなく、計画を手直ししながら実践を進めていくことで、子どものコミュニケーション能力を発揮する機会が増え、日常化に結びついていくことになった。最初に述べたように、「伝え合う力」の育成は学校教育全体の中で取り組んでいくことが大切である。その点からも、日常化につながる学習の場の広がりも期待される場所であり、コミュニケーション能力を育む上で重要な要因といえる。

7 今後の課題

以上、研究のまとめとして、子どもの学ぶ姿からとらえられたコミュニケーション能力を育む活動構成の要因について述べた。これらを踏まえて、さらにコミュニケーション能力の育成に努めていきたい。

しかしながら、ここで忘れてならないことがある。それは、コミュニケーションスキルの習熟に関する個人差の問題である。一律的な指導をしていくだけでは、個人差がさらに広がっていく結果を招きかねない。また、コミュニケーションは、相手との信頼関係が成り立ってこそ円滑に進められるものである。子ども相互が温かくかわっていき学級づくりを心がけるとともに、一人一人の個性や個人差に着眼し、それぞれに応じた支援のあり方を工夫して働きかけていくことが不可欠であると考えている。

注

- 1) 小学校指導要領解説 総則編 文部省 1999年, p.73-74
- 2) 岡田定之「かかわり合いので相手意識を持たせる」『子どもと創る「国語の授業」』, 東洋館出版社, 2001年, p.2-3
- 3) 青山由紀「ワークショップを手立てとした対話学習」『子どもと創る「国語の授業」』, 東洋館出版社, 2001年, p.14
- 4) 岡田定之 前掲2) のp.3